

---

# カフェ・グリュック

涼宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カフェ・グリユック

### 【Nコード】

N3164D

### 【作者名】

涼宮

### 【あらすじ】

世界でも64人しかこの持病を持っていないと言われる『熱中症症候群』を持っている相川春日 アイカワカスガ。熱中症で倒れているところをイケメンの井上さんに助けてもらい、その恩返しをする為に井上 イノウエさんと同じバイト先に勤めることにした春日のハッピーラブラブ(?) バイトライフが始まりますッ

## 第1話（前書き）

初心者で未熟者なので、読みにくいところもご了承ください承して頂いてから、お読み下さい。

## 第1話

バタツ。スッテーン！

はぁ・・・まただ。いー加減治ってくんないかな、熱中症症候群。一億人に一人という割合でなるといふ奇妙な持病。

つまり日本中でアタシしか、この持病を持っていないという事。一億人に一人だから、世界でも六十四人しかこの持病を持っていないって計算になるね。

でも、あの日あなたに会って、熱中症症候群を持っけて良かったって思えた。(ちよつとゲンキンだけどね)

だって、もし熱中症症候群を持ってなかったら、あの日あなたがアタシを助けてくれなかっただろうから。あなたと会えなかっただろうから。

だから、きつと今日もあなたはアタシを見つけて助けてくれる。さて、じゃあ、あなたがアタシを助けてくれるまで今までのこと、思い出してみようかな・・・。

### 熱中症 バイトライフ

あー寒い！あなたと出会えたのも、こんな寒い冬の日だったよね・・・

・・・・「ふわああ・・・んんん眠い！ついでに寒い！サムネムい！」今日は学校の始業式。つまり冬休み明けってことだね。今日は寒いけど、曇りだから熱中症になる心配は無いね！こーゆー時、うれしーんだか哀しーんだか分かんなくなる。ま、ぶっちゃけどっちでもイイんだけどね　！！（開き直り）

そういえば、なんか同じ学校の人いないなあ。一緒の方向から来る人結構いるんだけど・・・。ハッ！まッ、まさか！腕時計を見る。時刻はちょうど八時二十七分。

あと三分で始業ベルが鳴る。と・い・う・こ・と・は　・・・遅刻じゃ　ッ！！

ヤッベー！！急げ！ダッ！と走り出した。アレ？なーんか暑くなってきたマシタよ？上を見る。カツ！！と日光が降り注いだ。あ、そうそう。言い忘れてたけど、アタシ『相川　春日　アイカワ・カスガ』。

話に戻るけど、その日光を浴びた瞬間、アタシはクラッ！と目眩めまい　がして、そのままバタッ！と倒れた。

「ん・・・アレ？ここって・・・」「おい。起きたかよ」低い声音が上から聞こえた。目を開けると、二十歳くらいの男の人が春日の目の前にいた。

「え、あ、はい。え？・・・えーと・・・あなたが、助けて下さったんですか？」その男は少し戸惑うように春日から目を逸らし、呟くように「・・・ああ・・・」と言った。

「スッ、スイマセン！！ホントにありがとうございます！！・・・と、それでえ・・・ここは、一体？」「ああ、ここは『g u c k グリ ャック』つつー喫茶店だ。俺の勤め先。名前くらい、聞いた事ねーか？」春日は正直に言った。「あ、知りません。てゆーか、聞いた事も無いですね」「ああ、そーかよ。しっかし、こりやまたスツパリ言ってくれたモンだな。もうちつとオブラートに包んでもいいんじゃないのか？」「えッ！！ス、スイマセン！！」「・・・別にいいケドよ・・・。で？具合はどうだ？良くなったか？」春日の額に手の平を当てながら、男はそう言った。

「へっ、ダツダイジョーブですけど・・・！！？／／／／／（ナツ、なんかハズい・・・）」「？・・・そーか。ならいい・・・おい」「！？えっ！！？な、何ですかッ！？」

「ケーキ。食ってくか？食ってった方が帰り道、倒れねーだろ」「はあ・・・あの、お気持ちは嬉しいんですが・・・お、「お？」「お金を持つてなくて・・・っ！！」

「・・・」「・・・」「二人の間に沈黙が流れた。（・・・あーあ、絶対「それを早く言えッ！！」とか「・・・ならダメだな」とか言われるだろーなあ・・・）」

沈黙を破ったのは、その男の方だった。「……だから?」「え……?」「だから何なんだよ。金がねえから、食べねえとでも言うつもりか?」「へ?え、あの」「俺は」春日の言葉を遮って、その男はこう言った。

「俺は、お前に、帰り道倒れねえよーにケーキ食ってけつつたんだよ。誰も金の話なんてしてねーだろ。金よこせ、なんて一言も言ってねーだろが。オラ、早く何にすつか決めろ」「は、はい。え、えーと……では、レアチーズケーキを……」「ん。じゃ、あっちの席に座って待つてろ。ああ、でも無理ならここにいてもいいぞ」

「あ、じゃあ、ここにいさせて頂きます。すみません……っ」「謝ることじゃねえよ。無理されても、こっちが困るだけだ。だから、まあ……無理すんなよ」「あ、ありがとうございます……」

それから少ししてから、その男が来た。「お待たせシマシタ。レアチーズケーキです。ごゆっくりどうぞ」無愛想にニコリとせず、言って春日の前に差し出した。

「あ、スンマセン。ありがとうございます!」そのレアチーズケーキはおいしそうで思わず「わぁ……」と口から漏らしてしまった。「はっ!す、すいません!でも……本当においしそうです。イエー!おいしいんですよ!ウン!」「……」「チラと男の顔を見ると驚いた顔をしていて、一瞬だけフと柔らかに微笑んだ。

「……!」思わずドキツとしてしまう程の端正な顔に見惚れた。「……おい。食わねーのかよ。さっさと食べ」「へっ!あ、はい!」パクツと一口、口に含んだ瞬間、自然と笑みが零れた。

「……おいしいですっ。コレ、あなたが作ったんですか?」「

ん？あ、ああ・・・そうだが」「うつわあ・・・！！スツゴイですね  
！アタシはこんなの絶対作れませんよ！ほんと、スゴイ・・・」「・・・」  
「あつ、そーいえば。あのお、まだ教えてもらってませんよね」  
「・・・何を」「あなたの名前」「名を聞く前に、まず名乗れ」  
鶴の一声のように言われ、しぶしぶ名乗った。「あ、相川 春日  
アイカワ カスガ です・・・」「・・・俺は井上・・・・・・」  
だ」「？？井上さん、ですか？」「あ、ああ。そうだ」「そうです  
か・・・えっと、じゃあ井上さん！！」「ん」「あ、明日も・・・  
っ、来ていいですかっ！？」「くんな」「ええええ！！？（ガ  
ーン！！）」「

それから一息吐いて、控えめに笑いながら「バイト。すんなら来て  
もいいけど、な。っーか、しろ。人手足らねえから」

「め、命令形ですか・・・。でも、こんなステキなお店ならバイト、  
したいです！！」「・・・そりゃどーも」「これからよろしくお願  
いします！！」「ああ。・・・ああ、それと、相川！」「？ハイ？  
何でしょう？」

「・・・明日から、八時に集合だ。遅刻すんなよ」「・・・！  
！・・・はい！！」「ニッコリ笑って春日は返事をした。

これから、アタシの、ハッピーラブラブ(?) ライフ・・・はじま  
りはじまりいゝ



## 第1話（後書き）

いかがでした？よろしければ感想などもお書きください！  
あの、ホントに出来たらでいいんで・・・。

## 第2話（前書き）

〽前回までのあらすじ〽

熱中症症候群の春日はカフェ・グリユックでバイトをすることに。

大魔王の井上さん、王子キャラの芹田さん、変人色男の粹くん、美少年の依倅くんと一緒に今日もバイト！

そこに、春日と依倅くんの友達、すっちーこと鈴地優くんから二人に頼みが・・・？

なんと、すっちーの妹と弟のさくらちゃんと翔ちゃんが誰かにさらわれたって！？成り行きですっちーを助けることに。

だが、この事件には恐るべき謎が・・・！？

春日のハッピーラブラブ（？）バイトライフ、待望の第二話！

## 第2話

「おっはようございまーす!!」

みなさん、こんにちは！相川 春日 アイカワ カスガ でっす！  
今日も、ハッピーバイトライフを楽しみたいと思っておりますッ。

ぐゅっくりどろぞーっ

熱中症 バイトライフ

「オウ」「アレっ、井上さん！おはようございます。早いですねっ」  
「ああ。・・・ケーキの下準備があるからな」「あ、そうですよね  
！井上さんがケーキ作ってるんですモンね！」「お前な・・・いー  
かげん覚えるよ。何回朝同じ質問して同じ答え返されてると思って  
んだ・・・ッ」「スッ、スンマセン・・・!!」（あわわわ・・・  
マ、マジで魔王だよ、この人。魔王・・・）「何か言ったか」「イ  
エ、何も？」

と、まあ・・・こんなカンジで毎日営業しております。あ、そうそう！あと、3人他に働いてる人がいるんです。（ちなみに、この魔王の人は『井上さん』です。下の名前は知りません。今度追求してみようと思います）

ガラスと事務所のドアが開いて、178cmの男が現れた。

「井上さん。ケーキのスポンジ、焼けましたよ。冷やしておきますね。おや、春日さん。おはようございます。いつも遅刻せず偉いですね」と、穏やかな敬語口調で話しているのは、『芹田 朱鷺 セリタ トキ』さん。身長は井上より6cm低いです。ケーキを作る方の仕事をしてるんです。たまに接客もしてくれます。

「イエイエ、誇れる程のことじゃ無いですよ」「サンキューな、芹田。悪いな、いつも」「いえ、僕は好きでやらせて頂いているので・。逆に感謝したいくらいです。あ、そうそう。春日さん」

いきなり春日の方を見て、ニッコリ笑った。「コレ、エプロンです。どうぞ」「へっ、あっ、スンマセン！！あざーす！！」「芸人がバシッと井上が春日の頭をはたいた。

「ふふっ、では僕は奥で仕事をしているので、何かあったら何でもお申し付け下さい」そういつてまた事務所の中に入ってしまった。

キイ、カランと店のドアが開き、もう一人の男が入ってきた。

「おっはよーございまーす。あ、春日だ」「おっすー 粹くん！」「おう、粹」「井上さんには言ってませんケド。」「お前、殴られてーのか。しかも「には」って何だ、「には」って「

この井上さんに対しては、ちょっといい印象を持っていない変人少年は『沖田 粹 オキタ スイ』くん。変人だけど、スゴイ色男です。身長は173cmくらい。なんと名門の高校でいっつも学年トップなんですって！この外見からは全然想像付きませんよね（悪気なし）。

もう一度、カランと音がして店のドアが開いた。

「あつ、いらつしゃいませー！って、なーんだ。依倅くんか」「なんだってなんだ！失礼だな」「ごめん、ごめん。ホラ、エプロン着てきちゃいなよ」「言われなくてもそうするつもりだ」「んじゃ早くねー！」

さっき来たのは『近藤 依倅 コンドウ イサチ』くん。背は160cmです。男の子にしては背が小さいけど、スッゴイ美少年なんです！！一見、ボーイッシュな女の子と思っちゃうくらいです。ウィッグを付けるとホントに女の子になっちゃいます。

キイ、カランカラン

「あつ、お客さんだっ」「いらつしゃいまっせー！！」「イ  
ラッシャイマセ」「あ、ども！って、アレ？相川？？お前ココで  
バイトしてんの！？うつわー初耳！！」「え？あんら、すつちー！  
いらつしゃあいつ！！さ、さ、好きな席へどうぞっ」「おつ、サ  
ンキュー！相川、お前気が利くなあ！！」「いや、接客業だからさ  
・・」

ガラッ。

「あ、依倅くんっ。ほら見て見てー！！すつちーだよ！！」「ん？  
おお、鈴地！久しぶりだな。いらつしゃいませ」「おお。近藤もコ  
コでバイトしてんだな。いやあ、友達がバイトしてるトコなんて初  
めて見たぜ」

「え？でもお前もバイトしているんだろう？」依倅が言った。

「うん。まあな・・。母子家庭の長男だし、お袋も家族の為にがん  
ばってパートやってくれてるしな。妹と弟にも贅沢させてやりてえ  
し」「鈴地・・」「すつちー・・」

「ガンバレ。」「」「ハートが無え！！」「アハハ。冗談だつて  
でも、ホントががんばって！すつち、」「働け」ゴン、と鈍い音がし

て春日の脳天に井上の拳がクリーンヒットした。

「いったーッ！！何すんですかつ、井上さん！痛いじゃないですか！」「いつまでも、客とクツチャべってんじゃねえ！！しゃべんなら、バイト終わってからにしろ」

「ただのお客さんじゃありませんッ。ア・タ・シ・の友達ですッ！」「友達という名の客だろ」「違いますう！！大体何ですか、その「友達という名の客」って！！そんな具体的な名前のお客さんなんていませんよ！！いたら逆にこっちが哀しくなってきましたよ！」

「冗談に決まってるんだろ。それくらい分かれ。バカ」「バツ、バカって何ですか！？それにそこまで言うんなら、依倅くんだってスツゴイしゃべってたじゃないですか！依倅くんにもゲンコして下さいよ！！」「依倅はしゃべってたが、仕事もしてたぞ。お前も依倅を見習え」「ヘッ、ばーか。ざまーみろ、春日」「うっさいよ！！依倅くん！」

それから春日と依倅は真面目に働いた。

「ふう。そろそろ閉店ですねっ。お疲れさまでしたーッ！！」「お疲れ」「お疲れッした」「お疲れさま」「お疲れ様でした」

店を出ると、先程店に来ていた鈴地優 スズチ・スグル がいた。「あれッ、すっちー！どしたの？？もう閉店だよ？」「アッ！！相川！スマン、助けてくれッッ！！」「ええッ！？ど、どうしたの！

「!? あつ、依倅くん！ 大変、大変！！」 「!? な、何がどーしたツ!? 」

その後数十分、鈴地は春日と依倅に訳を話した。

鈴地の話によると、グリユックを出た後、家に帰ると母が倒れており置き紙で『弟と妹を返して欲しければ、バイトを辞めて交番前の公園に來い』と書かれていたそう。もちろんバイトを辞めるわけにはいかず、かと言って弟と妹を見捨てることもできるはずが無かった。そこで、春日と依倅を頼ってきた、というのだ。

「そつ、それは大変だよ！！ スグに警察に行かなきゃ・・・ツ！！」  
「いや、警察には行けねえ・・・」 「何故だツ!? これは立派な誘拐事件だぞツ!!? それにお前の母上が倒れていたのも、ソイツが関係している可能性もあるんだぞ?! それなのに、警察に行かないでどうするツ!! 」 「そうだよ! もうアタシ達には手に負えない事になつてゐるかもしれないんだよ!!? 」

「・・・それは、分かつてる。けど、置き紙に『交番前の公園に來い』って書いてあつたんだ。これはつまり、完全に警察をナメてる・・・。『警察に行つてもムダだ』って言つてゐるようなモンじゃねーか・・・ツ? 」

「そ、そーなのツ?! じゃあ・・・アタシ達で何とか二人を助け出すしかない、ね・・・」 「ああ。だが、俺達子供だけで行つても・・・」  
「おい」 「・・・え? 」 「・・・」



3人とは違う声が混ざった。

「依倖の言う通り、子供だけで行くのは危険だ。それに、ウチのバイトが危険に飛び込んでくの見逃したら、責任問題になりそうだからな。付いてってやるよ」「僕もぜひご一緒させて頂きたいですね。おもしろそうですから。ただ、くれぐれも無茶はしないで下さいね」

「井上さん・・芹田さん・・」「面目ありません。恩にきります・・っ」「す・・すいません!!ありがとうございます!!」「いよいよ!!じゃあ皆でレッツゴー!!!」

みんなで公園に行こうとした、その時。「あれ　　ッ?おにいちゃん、どうしたの?こんなところで」「あつ!!ホントだ!にーちゃん!!なんでココにいの!!?」「」「」「え?」「」

「さくら・・ッ!?翔・・!?」「え・・な、なんで!?だ、だつて二人はさらわれて、置手紙も・・」「てがみ??」「そ、そうだよ!お前らこそ、なんでココにいた!?公園にいるんじゃないのか!?」「あー!!それはね、おかーさんと『ゆーかいじけんごっこ』やってたから!おかーさんがおまわりさんで、おれとさくらが、ひがいしゃ!!」「じゃ、じゃあ、犯人は!?」「え、はんにん?あ、そうだった!しょうちゃん、わたしたち、はんにんさんをきめるためにこうえんにいったんだよ!わすれてた!!」「あー、そーだった!」

「え、じゃあ、だから『弟と妹を返して欲しければ、交番前の公園に來い』って書いたの？」「うん！！」「あ・・・そういえば・・・」

鈴地がなにかを思い出した。「どうかしたの？すつちー」「文字、全部ひらがなだった・・・」「え・・・」

ということで、この『さくらちゃん・翔ちゃん誘拐事件』はひっそりと幕を閉じた。

また、その後の二人の話によると、鈴地の母が倒れていたのは、『警官が拳銃で撃たれた』という設定だからだそうだ。そして、疲労のあまりそのまま寝てしまった、ということだった。

「へえ　え。そんなことがあったんだー。みんなズルいなあ。楽しくしちゃってさ・・・」「何言ってるの！大変だったんだからね！ホントに最初はビックリしちゃったよ。ねえ？依倖くんッ」「ああ。全くだ。毎回あの兄弟には困らされるな・・・」「そうですね・・・。でも、たまにはああいうのもいいと思いますよ？僕は少し楽しかったですけどね」「井上さんは、どうでしたッ？」「ハッ・・・あんなの疲労蓄積以外の何物でもねーだろッ」「・・・それもそうですねー・・・」

でも、アタシはその時、まだ気が付きませんでした。井上さんと芹田さんの様子が少しおかしい事に・・。

そしてとうとう、あの忘れられない出来事が起きてしまったのです・・

## 第2話（後書き）

いかがでしたかッ！？ここまで読んで下さって、ありがとうございます！  
ました！！

では、また！S p e c i a l   T h a n k s ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3164d/>

---

カフェ・グリュック

2010年12月23日14時28分発行